

芭蕉翁顕彰

第100号 令和7年8月

はりぬきの
猫もしる也

今朝の秋

芭蕉



ごあいさつ

公益財団法人芭蕉翁顕彰会会長

野口俊史



公益財団法人芭蕉翁顕彰会会長の重責をお引き受けして二年目を迎えました。会員の皆様はじめ市民の皆様、また俳句に親しむ全国の皆様には、日頃より芭蕉翁の顕彰にご理解ご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

昨年は「芭蕉翁生誕三八〇年」の年に当たり、市を挙げて多くの記念イベントが行われました。さらに毎年十月十二日に実施される「芭蕉祭」が来年度は八十回目を迎えます。伊賀市に根付いた芭蕉翁の偉大さ及び歴史の重みを改めて認識しています。

ところで伊賀市では多くの人が、「芭蕉翁」を「芭蕉さん」と呼んで親しんでいます。

伊賀市の小学校では十月十二日の「芭蕉祭」に向けて夏休みに俳句を十句作るのが宿題でした。小学校はみんなそうではないと知ったときはびっくりしたものです。また、校内芭蕉祭では、毎年「芭蕉さん」を歌いました。

野の草に 谷間の花に

杖とめて 「自然」をさぐり

詩に生きる ああ芭蕉さん

中学校の名前は「桃青中学校」でした（今は統合でなくなっていますが）。芭蕉の若かりしときの名前です。その校歌は、一番にいきなり芭蕉が出てきます。

わが俳聖の故郷に

その名ゆかしき桃青の

誠求めて朝夕に

集えるわれら 誉れあり

また、この通学路の途中に少し横道に入つた所に、「さまざま園」がありました。芭蕉四十五才伊賀に帰省した時、亡くなった藤堂良忠のこと、若かりし時の思いを「さまざまのこと思い出す桜かな」と詠んだ場所といわれています。

伊賀市の人たちは、それぞれ違いがあれ、芭蕉翁とのかかわりを持ちながら育ってきていると思います。

こうした伊賀の風土の中で、伊賀市、各地域、学校をはじめ俳句会・俳句サークル等々の行事や活動も数多く行われています。

芭蕉翁顕彰会では子どもから大人までの俳句入門教室はじめ芭蕉にかかわる講演会など親しみやすい、参加しやすい多くの機会を計画しています。

芭蕉翁の業績をそれぞれの立場の皆さんと共に伊賀市から日本・世界に、そして後世に伝えていくために顕彰会としての役割を果たしていきたいと考えています。

今後とも皆様のご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。

巻頭句解説

延宝七年（1679）の秋ごろに詠まれた句です。風の変化で秋の訪れを知る伝統は、平安時代以来続くものです。この句では、人ではなく張り子の猫までも、立秋の朝の風の変化に気が付いて、首を振っていることだ、とユーモラスに表現しています。風に揺られるおもちゃの猫への芭蕉翁のやさしいまなざしが感じられます。

蕉翁芭彰顯

第100号

編集・発行／公益財団法人

蕉翁芭彰顯会

〒

518

0873

三重県伊賀市上野丸之内

1-1-7

の13

／電話

0595

5・21

・408

1